

城下町遺跡

－6次調査－

2019年

日田市教育委員会

序 文

日田市は、九州北部のほぼ中央、大分県の西北部に位置しています。

市の中心は盆地であり、その周囲は山々に囲まれ、そこからの豊富な水が清流となり、私たちの街を潤し、それが故「水郷日田」と呼ばれております。すいきょうひた

文化の面では、古くから交通の要衝であり、近世におきましては、江戸幕府の直轄地として西国筋郡代が置かれ、九州の政治・経済・文化の中心として栄えた輝かしい歴史を誇ります。

その近世、江戸時代から始まったとされるのが、国指定重要無形民俗文化財となっている祇園祭です。絢爛豪華な山鉾の巡行、その山鉾に活力を与える祇園囃子は、現在、日田の夏の風物詩といえます。

さて、本書は、そういった日田祇園の曳山行事の保存・継承等を図るための日田市豆田地区の山鉾収納庫整備事業に伴って発掘調査を実施した城下町遺跡6次調査の内容をまとめたものです。

調査では、東西を軸とするふたつの溝が確認され、その状況などから、過去、調査地では繰り返し水が流れていることが判明しております。

また、この溝の中からは縄文時代から古代にかけての遺物が出土しており、調査地の周囲に、過去の人々の生活の痕跡が残されていることを想像させられます。

今回の発掘調査の成果が、文化財の保護や地域の歴史への活用はもとより、今後の土地利用のあり方や、防災意識の醸成の参考資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の作成に至るまで、御指導・御協力を頂きました方々に対し、心から感謝申し上げます。

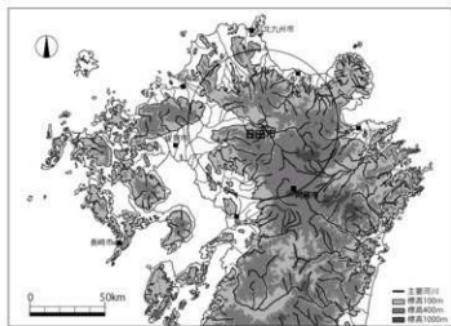
令和元年12月

日田市教育委員会

教育長 三筈 真治郎

例　　言

1. 本書は、豆田地区日田紙園山鉢収納庫整備事業に伴い、埋蔵文化財調査を実施した城下町遺跡6次調査地の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日田市教育委員会が平成30年度に実施した。
3. 調査にあたっては、地元の方々にご協力をいただいたほか、特に隣接地の方には、調査中ご配慮をいただいた。
4. 発掘調査での調査地および遺構等平面図、土層図作成（製図含む）は、株式会社九州文化財総合研究所に委託した。また、出土遺物の実測（製図含む）および写真撮影は、雅企画有限公司に委託した。
なお、調査現場での写真撮影は調査担当者が行った。
5. 本書に掲載した空中写真は、有限公司測量企画センターに提供していただいたものである。
6. 挿図中の方位は、方眼北を示している。
7. 写真図版の遺物に付した数字番号は、挿図番号に対応する。
8. 出土遺物および調査に関する記録等は、一括して日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
9. 本書の編集および執筆は、今田が行った。
10. 本書を作成するあたり、市文化財保護課の同僚のほか、坪根伸也（大分市教育委員会）、林潤也（福岡県大野城市教育委員会）、越智淳平（大分県立歴史博物館）、原田華子（日田市土木建築部建築住宅課）の4氏に、ご指導・ご教示をいただいた。



日田市の位置



大分県の行政地区

本文目次

I 調査の経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘調査の経過	1
(3) 本調査地の調査次数について	3
(4) 調査の組織	4
II 遺跡の立地と環境	5
III 調査の内容	8
(1) 調査の概要	8
(2) 検出された痕跡と遺物	8
IV まとめ	14

挿図目次

第 1 図 調査位置図 (1/400)	2
第 2 図 過去の調査位置図 (1/4,000)	3
第 3 図 日田盆地周辺の おもな山群と原(段丘)	5
第 4 図 日田盆地の地形概形	5
第 5 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第 6 図 調査地平面図 (1/300)	8
第 7 図 1 区平面図 (1/80)	9
第 8 図 1 区土層断面図 (1/40)	10
第 9 図 2 区平面図 (1/80)	11
第 10 図 2 区土層断面図 (1/40)	11
第 11 図 1 区出土遺物実測図 1 (1/2)	12
第 12 図 1 区出土遺物実測図 2 (1/3)	12
第 13 図 2 区出土遺物実測図 (1/3)	13
第 14 図 豆田町と調査地の位置	15

図版目次

図版 1 上 調査地遠景 1 (城内原・元宮原を望む)	
下 調査地遠景 2 (月隈を望む)	
図版 2 上 調査地遠景 3 (城内川下流側を望む)	
下 調査地全景 (上空)	
図版 3 上 1 区全景 (上空) · 1 区完掘状況 (東から) · 1 区完掘状況 (西から)	
下 2 区全景 (上空) · 2 区完掘状況 (東南から) · 2 区完掘状況 (西北から)	
図版 4 土層 5 · 土層 4 · 土層 1 · 土層 2 · 土層 3	
図版 5 出土遺物	
図版 6 発掘作業風景 表土除去風景 · 1 区発掘作業風景 · 2 区発掘作業風景	

表目次

第 1 表 出土土器等観察表	22
第 2 表 出土石器等観察表	22

写真目次

写真 1 日田祇園山鉾	1
写真 2 空中写真撮影風景	3
写真 3 埋め戻し作業風景	3
写真 4 1 区検出作業風景	7
写真 5 2 区検出作業風景	7
写真 6 1 区発掘作業風景 (1)	7
写真 7 1 区検出作業風景 (2)	7

I 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

日田市では、毎年7月20日過ぎの土曜日、日曜日に祇園祭が行われ、隈・竹田地区4基、豆田地区4基、そして平成2年に製作された平成山鉾1基を合わせた計9基の山鉾が、祭り期間中曳き廻される。

この「日田祇園の曳山行事」は、平成8年12月20日に国の重要無形民俗文化財に指定され、平成28年11月30日には「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録されている。

日田祇園山鉾振興会および豆田地区振興協議会、そして豆田下町、中城町、豆田上町、港町4町の山鉾振興会は、平成28年3月及び平成29年1月に、日田市長へ、豆田地区での祇園山鉾収納庫建設に関する要望書を提出した。

これを受け、日田市では山鉾収納庫を建設する建設委員会に対し、補助金を交付することとし、平成29年10月に、山鉾収納庫を平成30年に建築することが決定した。

平成29年10月24日、日田市長原田啓介より、「大分県日田市港町400-1ほか」の土地に対して倉庫建設工事を目的とし、文化財保護法第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知文書が提出された。これを受け、日田市教育文化財保護課は、翌25日に山鉾収納庫建設予定地の埋蔵文化財確認調査を実施した。

この確認調査で、溝状遺構と土坑が検出され、弥生土器とみられる土器片が出土したことから、日田市教育文化財保護課は、この土地に対し、工事に際しては事前の本発掘調査が必要と判断するとともに、本発掘調査にかかる費用は日田市が負担するものとし、その調査費を予算計上した。

平成30年10月17日、豆田地区日田祇園山鉾収納庫建設委員会会長石井博基より、日田祇園山鉾収納庫および倉庫建築工事に先立ち、「大分県日田市港町400-1」の土地に対して、日田市教育委員会教育長宛に、埋蔵文化財の所在の有無についての照会文書、あわせて文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出文書が提出された。これを受け、日田市教育文化財保護課は、前年度確認調査を行った範囲の外に位置する倉庫建築箇所について、同月26日に確認調査を実施した。

この確認調査では、昨年度の調査で確認されたものに繋がるとみられる溝状遺構が検出された。

日田市教育文化財保護課は、建築の工法および2回の確認調査の結果から、埋蔵文化財の破壊が免れない山鉾収納庫建築位置約116m²については、記録保存のための発掘調査が必要であると判断した。

なお、本対象地は、日田条里遺跡と城下町遺跡の二つの埋蔵文化財包蔵地の範囲として括られているが、2回の確認調査において条里を示すような遺構が存在していないことから、本発掘調査にあたっては城下町遺跡とすることとした。

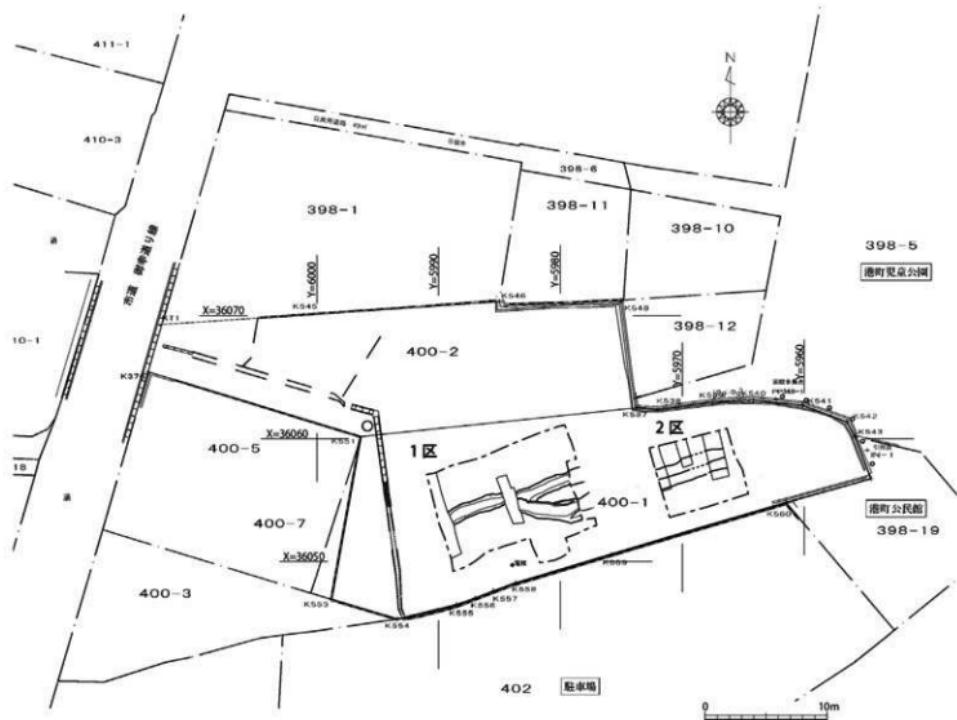
(2) 発掘調査の経過

本発掘調査は、平成30年12月5日より開始した。

発掘調査を実施するにあたって、山鉾収納庫建築位置約116m²を1区とし、倉庫建築位置約44m²を2区と区分けし、調査対象面積を約160m²とした（第1図）。



写真1 日田祇園山鉾



第1図 調査地位置図 (1/400)

なお、工事により地下の埋蔵文化財に影響の及ばない2区に関しては、遺構の検出作業を行い、必要に応じて状況確認のため、確認トレンチを設定することとした。

平成30年12月5・7日、重機による表土剥ぎを行い、同7日から人力による検出作業を始めた。

検出作業の結果、重なったり離れたりしながら東西に流れているとみられる一筋の溝を確認した。

検出作業後、同10日より、1区に溝の層序等確認のためのトレンチを、調査区の東西の端と中央付近の3箇所設定し、2区には、調査区西端に溝の層序確認のためのトレンチを設定するとともに、上面検出のみでは溝の状況が正確に判らなかった調査区東側と中央付近の2箇所にトレンチを設定し、10～20cmほどの掘下げを行った。

同26日までに、各トレンチおよび溝の掘下げを終了し、翌27日に空中写真を撮影し、その翌28日に重機による埋め戻し作業を行い、発掘調査を終了した。

整理作業は平成31年1月4日から開始した。同日より遺物の水洗作業を始め、同22日に遺物の接合作業を終えた。遺物実測および遺構製図作業については同年2月5日に、遺物の製図及び写真撮影は同年2月22日に業務発注し、同年3月27日までに業務を完了した。



写真2 空中写真撮影風景
〔協力〕有限会社測量企画センター



写真3 埋め戻し作業風景

(3) 本調査地の調査次数について

日田市では、平成21年度に同一埋蔵文化財包蔵地内で行われる本発掘調査と、史跡内の確認調査については、その調査地に対して、市教育委員会の調査以外も合わせて、調査次数を整理・統一することとしている。

本調査地は、埋蔵文化財包蔵地としては城下町遺跡に括られている。

城下町遺跡では、これまでに以下のとおり5次の調査が行われている（章末文献・第2図参照）ことから、本書で報告する調査地については6次調査となる。

〔1次調査〕防災施設建設事業に伴う調査
(平成23年度)
調査地…日田市大字豆田123-1

〔2次調査〕防災施設建設事業に伴う調査
(平成24年度)
調査地…日田市大字豆田123-1

〔3次調査〕国指定重要文化財 草野家住宅
保存修理工事に伴う調査
(平成27年度)
調査地…日田市大字豆田127

〔4次調査〕国指定重要文化財 草野家住宅
保存修理工事に伴う調査
(平成28年度)
調査地…日田市大字豆田127

〔5次調査〕国指定重要文化財 草野家住宅
保存修理工事に伴う調査
(平成29年度)
調査地…日田市大字豆田127



第2図 過去の調査位置図 (1/4000)
※地図の上が北

(4) 調査の組織

城下町遺跡6次調査の調査主体は日田市教育委員会であり、発掘調査の各年度の体制は以下のとおりである。
(なお、職名・氏名は当時のままである)

平成30年度（2018年度）発掘調査・整理・報告書作成作業

調査責任者 三吉眞治郎（日田市教育委員会教育長）
調査統括 梶原康弘（日田市教育庁文化財保護課長）
調査事務 安岡佳克（日田市教育庁文化財保護課 主幹 埋蔵文化財係総括）
今田秀樹（同主査） 行時桂子（同主査） 長祐一郎（同主査）
調査担当 今田秀樹（同主査）
調査員 今田秀樹（同主査） 行時桂子（同主査）
若杉竜太（同主任）※平成29・30年度確認調査担当 上原翔平（同主任）
発掘作業員 河津モリ 合原建國美 小暮裕次 財津真弓 坂本隆 宮崎芳信 森山敬一郎
整理作業員 吉田里美

平成31年度（令和元年度：2019年度）報告書作成作業・報告書印刷

調査責任者 三吉眞治郎（日田市教育委員会教育長）
調査統括 宮本達美（日田市教育庁文化財保護課長）
調査事務 安岡佳克（日田市教育庁文化財保護課 主幹 埋蔵文化財係総括） 河津秀樹（同主幹：7月～）
今田秀樹（同主査） 長祐一郎（同主査） 水嶋武彦（同主査：4月のみ）
樋口かおり（臨時職員）
報告担当 今田秀樹（同主査）
調査員 今田秀樹（同主査） 行時桂子（同主査） 上原翔平（同主査）

【引用・参照文献】

- 小泊立矢 1990「第四編 第六章 第二節 三祇園会」「日田市史」日田市
若杉竜太 2012「1. 城下町道路調査概要 一防災施設建設事業に伴う発掘調査一」「平成23年度（2011年度）日田市埋蔵文化財年報」日田市教育委員会
若杉竜太 2013「5. 城下町道路2次調査 一防災施設建設事業に伴う発掘調査一」「平成24年度（2012年度）日田市埋蔵文化財年報」日田市教育委員会
若杉竜太 2016「7. 城下町道路（重要文化財草野家住宅） 一保存修理工事に伴う発掘調査一」「平成27年度（2015年度）日田市埋蔵文化財年報」日田市教育委員会
若杉竜太 2016「城下町道路」市内道路発掘調査報告書 17 日田市埋蔵文化財調査報告書第124集 日田市教育委員会
若杉竜太 2017「2. 城下町道路（重要文化財草野家住宅） 一保存修理工事に伴う発掘調査一」「平成28年度（2016年度）日田市埋蔵文化財年報」日田市教育委員会
若杉竜太 2019「4. 城下町道路（草野家住宅）調査概要 一保存修理工事に伴う発掘調査一」「平成29年度（2017年度）日田市埋蔵文化財年報」日田市教育委員会

II 遺跡の位置と環境

城下町遺跡 6 次調査地は、大分県日田市港町 400 番 1 に所在する。

日田市は大分県の西部にあって、九州全体でみると北に偏った中央内陸部に位置しており、行政区では東に玖珠郡玖珠町及び熊本県阿蘇郡小国町、同南小国町と、北には中津市及び福岡県田川郡添田町と、西に福岡県うきは市及び同朝倉市、同朝倉郡東峰村、同八女市と、南に熊本県阿蘇市及び同山鹿市、同菊池市と、7 市 4 町 1 村と境を接している。また、周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の美しい山々に囲まれ、これらの山系から流れ出る豊富な水は九州最大の河川、筑後川となる。筑後川の上流にあたる玖珠川、大山川、花月川の水は、日田盆地で合流し、筑後・佐賀平野を貫流しながら、有明海へ流れ込む。

市域の中央やや北寄りに位置する日田盆地は、現在市街地となる。日田盆地中央部のいちばん低い標高 80 m ~ 100 m の底部は三隈平野と呼ばれ、この盆地底の沖積面周囲には、阿蘇 4 火碎流の流出により形成された溶岩台地が廻り、さらに内側の一級低いところの標高約 150 メートル内外の段丘がほとんど水平に連なっている。また、これら段丘上は、吹上原、葛が原、佐寺原、城内原、元宮原など、原（はる）と呼ばれる（第 3・4 図：【参考文献】中島 1974 より転載）。

三隈平野の中には、こういった段丘より切り離された日隈、月隈、星隈といわれる残丘がある（第 3 図）。城下町遺跡は、日田盆地のほぼ中央の沖積面に位置している（以下、第 5 図参照）。

遺跡地の北側には月隈と呼ばれる残丘があり、遺跡地はその残丘下から、南に花月川、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている豆田町を取り込み、その南端となる城内原までの範囲に展開している。

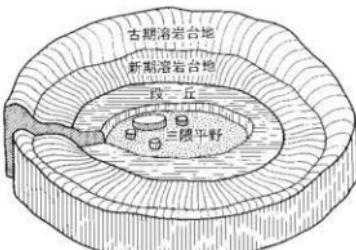
今回の 6 次調査地は、周知遺跡範囲の南端にあたり、調査地の南側には東から西に城内川が流れている。

調査地の地形は、盆地東側に展開する城内原や元宮原などから延びてきていたであろう微丘陵の端部付近にあたるとみられ、東側が高く西側へ若干傾斜している。ちなみに、調査時検出面の標高では、東側が約 83.8 m で西側が約 83.5 m であり、やはり西に向かって低くなっていることが解っている。

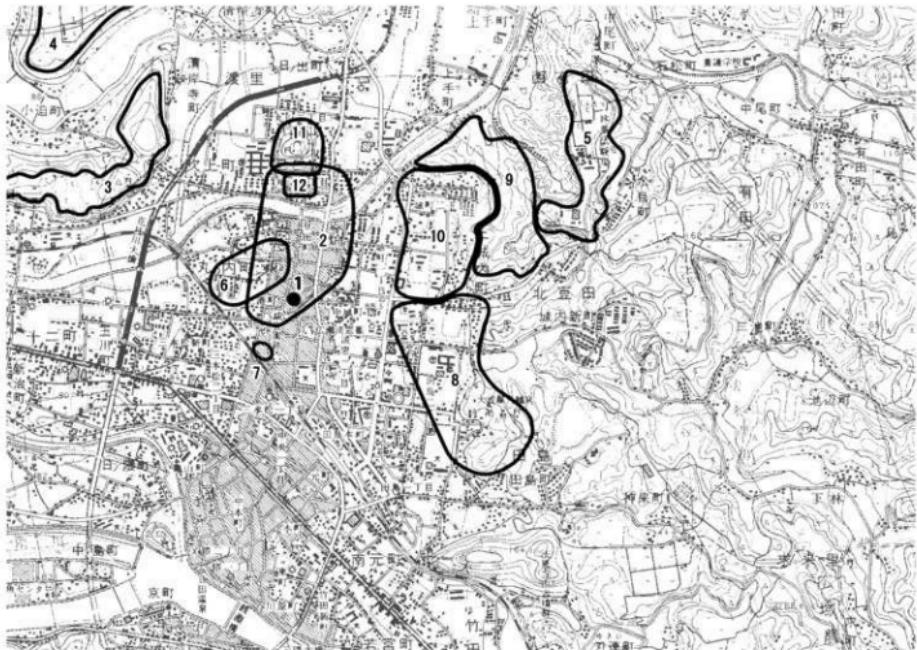
歴史的な面については、日田市域全体を見渡せば、古くは約 3 万 4 千年前の年代が測定された高瀬Ⅲ遺跡など、盆地南側の五馬台地の多数の旧石器時代遺跡や、筑後川（三隈川）上流の大山川沿いで確認された立派な石組垣を持つ縄文時代の竪穴住居を持つ中川原遺跡など、旧石器から縄文時代の良好な遺跡が存在するものの、盆地中央部ではこの時代の良好な遺跡は少ない。



第 3 図 日田盆地周辺のおもな山群と原（段丘）



第 4 図 日田盆地の地形の概形



第5図 周辺遺跡分布図（1/25,000）※地図の上が北

- 1.調査地 2.城下町遺跡 3.吹上遺跡 4.小追辺原遺跡 5.佐寺原遺跡 6.一丁田遺跡
 7.下中城遺跡 8.大波羅遺跡 9.大藏古城跡 10.慈眼山遺跡 11.月隈城（丸山城・永山城）跡 12.永山布政所跡

弥生時代から古墳時代にかけては、盆地周囲の段丘（台地）上に大集落が展開される吹上遺跡や小追辺原遺跡、佐寺原遺跡などがみられ、日田の遺跡の代表的なものとなっている。近年では、盆地内においても同時期の集落の発見が相次いでおり、調査地付近ではその北西側 200 mほど離れた場所に位置する一丁田遺跡で弥生時代後期から古墳時代中期の集落がみつかっており、南西側 280 mほど離れた下中城遺跡では弥生時代後期の堅穴住居が 2軒みつかっている。なお、この 2 遺跡は盆地内においても沖積微高地に形成されたとみられるものである。

古代には、遺跡地の東の大波羅遺跡で官術的要素の認められる遺構が確認されている。また、遺跡地の北東の方角には、中世の約 250 年にわたり日田を治めた大藏氏の居城である慈眼山（大藏古城跡）が聳えており、その城下に位置する西側の慈眼山遺跡は、これまでの調査で 14 世紀後葉から 16 世紀後葉の居館跡とみられている。

慶長 6 年（1601 年）に、遺跡地の北側の残丘、月隈に城が築かれるが、その城下に建設された城下町が遺跡地である。

また、江戸時代、遺跡地北側を流れる花月川（当時の豆田川）を分流させ、人工的に開削された河川が調査地南側を流れる城内川（当時の中城川）である。

なお、日田は貞享 3 年（1686 年）以降、慶応 4 年（1868 年）まで、代官支配となり、明和 4 年（1767 年）には日田代官が西国筋郡代に昇格し、九州の諸大名を監視する役割を果たすようになる。あわせて、その権威に結びついた町人の勢力が強まり、近世日田の繁栄に繋がっていったといえよう。

【参考文献】

- 中島国夫 1974『地質編 日田盆地のなりたち』『日田市30年史』日田市
日田市 1990『日田市史』日田市
今田秀樹編 2003『高瀬町道路・亀石山遺跡』天瀬町埋蔵文化財調査報告書第7集 大分県日田郡天瀬町教育委員会
小橋和弘 2004『第2章 4 [519 大藏古城 日田市大字北ア豆田字古城、高城]』『大分の中世城館 第四集 種論編』大分県
文化財調査報告書第170輯 大分県教育委員会
宮本雅明編 2004『日田田辺町 日田市豆田町伝統の建造物群保存対策調査報告書』日田市教育委員会
後藤宗復・橋昌信・今田秀樹 2005『天瀬の道路』『天瀬町誌(改訂版)一明日への提一』天瀬町
渡邊隆行・矢羽田空空 2006『一丁田道路』日田市埋蔵文化財調査報告書第68集 日田市教育委員会
渡邊隆行編 2008『一丁田道路Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第83集 日田市教育委員会
今田秀樹編 2010『中川原道路 - 2次調査の概要-』日田市埋蔵文化財調査報告書第93集 日田市教育委員会
比嘉えりか・若杉竜太ほか 2011『佐寺原道路 - 2・3次調査-』日田市埋蔵文化財調査報告書第98集 日田市教育委員会
今田秀樹・行時桂子 2011『大波羅道路 - 5次調査の概要-』日田市埋蔵文化財調査報告書第100集 日田市教育委員会
坂本嘉弘 2011『慈願山道路 国家公務員合宿舎(日田住宅)建設事業に伴う理蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵
文化財センター調査報告書第55集 大分県教育庁埋蔵文化財センター
日田市教育府文化財保護課編 2012『日田市の歴史と文化』日田市教育委員会
豊田真三 2013『第6章 永山城と永山布政所について』『永山城跡Ⅱ 発掘調査概要報告』日田市教育委員会
若杉竜太 2017『一丁田道路 3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第129集 日田市教育委員会
上原翔平 2019『1. 日田条里道路下中城道路 一病院建設に伴う発掘調査-』『平成29年度(2017年度)日田市埋蔵文化財年報』
日田市教育委員会



写真4 1区換出作業風景



写真5 2区換出作業風景



写真6 1区発掘作業風景 (1)



写真7 1区発掘作業風景 (2)

III 調査の内容

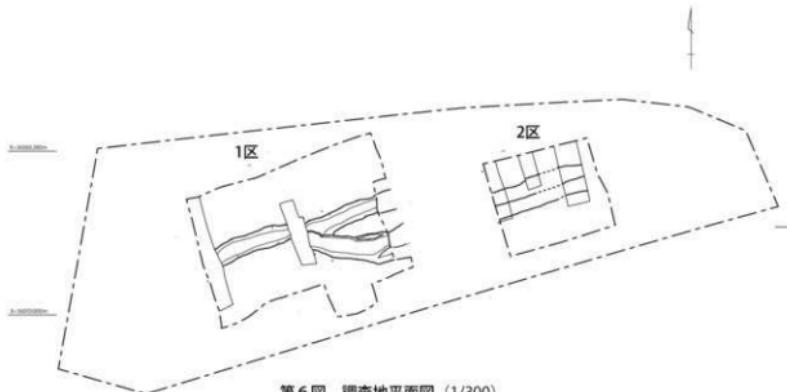
(1) 調査の概要 (第6図)

本調査においては、西側の山鉢収納庫建築箇所を1区、東側の倉庫建築箇所を2区とし、工事により地下の埋蔵文化財が破壊される1区に対しては完掘することとし、埋蔵文化財に影響の及ばない2区に関しては、検出作業後、その状況確認までの調査とすることとした。

調査では、重機にて表土および過去の水田基盤層を除去後、人力での発掘作業を実施した。

調査地の検出面は、人頭大から指先大の円礫を多く含む砂質土層であり、1区の中央を東西に流れる溝の中に外の検出面下においても遺物の出土がみられた。

なお、調査面積は、1区が約116m²、2区が約44m²である。



第6図 調査地平面図 (1/300)

(2) 検出された痕跡と遺物

調査では、2区から1区に向かって流れていたとみられる溝と縄文時代から古代にかけての遺物が確認された。以下、それらについて説明を行う。

1. 検出された痕跡 (第7・9図)

先に述べたとおり、調査地の中心には東西に流れる溝が認められ、それが今回の調査の中心になったものの、明確に遺構と呼べる痕跡を確認することは出来なかった。

この溝については、平面で見ると、その色調から、2区で2本あったものが、1区の中央付近で交わり1本になっているように見て取れる。ただし、この明瞭に判断される黒褐色系の色調の溝の埋土を掘り進めると、その外側や下位の土壤との色調の差は明確ではなく、疎らに土の質（実際は砂質土）が変化していっている部分が多くかった。

このことから、1区においては4箇所、2区においてはその西端に1箇所、土層確認のポイントを設けた。

以下、溝の流れの起点側とみられる東側から順に土層をみていく。なお、発掘作業は、溝内部の黒褐色系の色調の埋土および下位の土層との境がハッキリしない部分までの掘削とした。

【土層5（2区西端）】(第10図)

黒褐色系の5層や6層付近で二つの流れを見て取れるが、それ以前に8層にしっかりとした溝が存在して

いたことが判る。ただし、8層の中においても明瞭に線を引くことは出来ないが、若干色調の異なる層が存在していることが見て取れる。また、7層や9層下位においても、溝という形状を成していたかどうかは判らないが、水が流れていたことを窺うことが出来る。

[土層4（1区東端）]（第8図上）

黒褐色系の5・6層や7層付近で二つ流れを見て取れるが、7層の下位の10層にも過去のしっかりとした流れがあったと判る。また9層も、現状では溝という形状を成していたかどうかは判らないが、水が流れていたことを窺うことが出来る。なお、8層については、調査区内の上部が搅乱を受けていたため、この断面のみにて確認出来たものであり、溝の可能性が窺えるものである。

[土層1・2（1区中央）]（第8図下-中・右）

2本の溝の接合箇所を観察したものである。

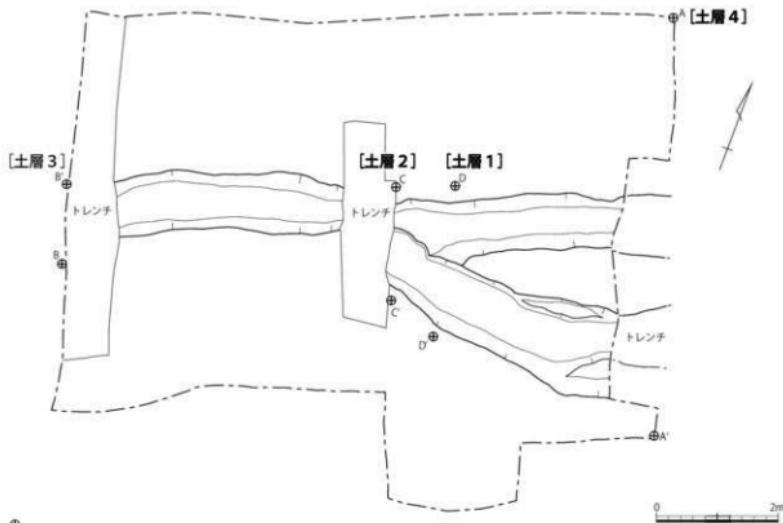
北側の溝の埋土である1層が、南側の溝の埋土である2層を切っていることから、北側の溝の方が新しいことが判る。2層形成以前の3層は、2層よりも幅広かったとみられるが、北側の立ち上がりは明瞭ではなくなり4層（土層2）との区別は不明瞭となっている。

[土層3（1区西端）]（第8図下-左）

この付近は、過去に削平を受けており、溝の残りも悪い。明瞭に溝と判るのは黒褐色系の2・3層だが、その下位の4層は、溝という形状を成してはいないが、付近で水が流れていることを窺わせる。

以上、今回の調査で検出した溝を、平面および断面で観察した。それにより、調査地は、沖積面の微高地と微高地の間に存在するであろう谷部にあたるのではないかと見て取れた。また、溝状の形状を成し、水が流れていった時代以外であっても、常に水が流れるような、水が寄って来るような地形であったことが容易に想像された。

溝の中以外の検出面で確認された遺物らは、そういった水の流れによって運ばれてきたものであろう。



第7図 1区平面図 (1/80)

土層4

[土層4]

- 1 地表
2 砂質土
3 黒褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
4 黑褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
5 黒褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
6 黒褐色の質地
7 黒褐色の質地
8 黒褐色の質地
9 黒褐色の質地
10 黒褐色の質地
11 黒褐色の質地

4号…砂質土層（やや粘性を帯びている）
5号…砂質土層（やや粘性を帯びている）
6号…砂質土層（やや粘性を帯びている）
7号…砂質土層（やや粘性を帯びている）
8号…砂質土層（やや粘性を帯びている）
9号…砂質土層（やや粘性を帯びている）
10号…砂質土層（やや粘性を帯びている）
11号…砂質土層（やや粘性を帯びている）

△8号は、地表ではないとみられる。後述（他地盤）の規則性の可否が考へられる。

土層3

[土層3]

84.00m

土層2

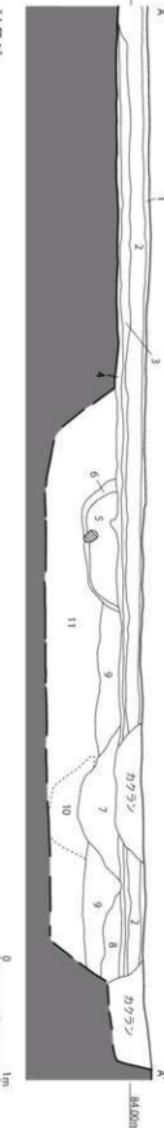
[土層2]

84.00m

土層1

[土層1]

84.00m

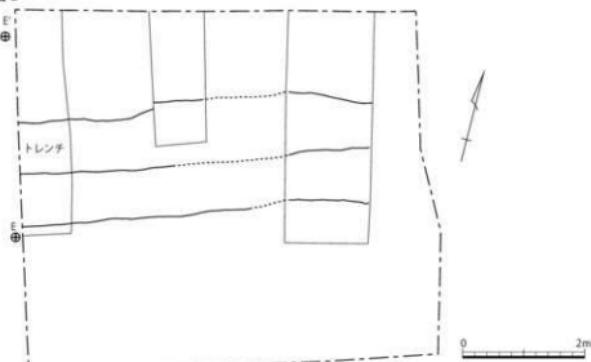


- 1 地表
2 砂質土
3 黒褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
4 黑褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
5 黑褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
6 黑褐色の質地
7 黑褐色の質地
8 黑褐色の質地
9 黑褐色の質地
10 黑褐色の質地
11 黑褐色の質地

- 1 地表
2 砂質土
3 黒褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
4 黑褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
5 黑褐色の砂質土層（やや粘性を帯びている）
6 黑褐色の質地
7 黑褐色の質地
8 黑褐色の質地
9 黑褐色の質地
10 黑褐色の質地
11 黑褐色の質地

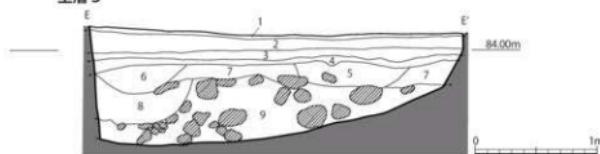
第8図 1区土層断面図 (1/40)

土層5



第9図 2区平面図 (1/80)

土層5



第10図 2区土層断面図 (1/40)

【土層5】

- 1層…淡褐色土層
※表土
- 2層…碎石
- 3層…青灰色砂質土層
※水田耕作土とみられる
- 4層…淡褐色土層 (やや粘性を帯びている)
※水田耕作土とみられる
- 5層…明瞭褐色土層
(やや砂質で、軟らかい部分がある)
- 6層…黒褐色土層 (やや砂質で、軟らかい)
- 7層…淡褐色砂質土層 (キメ緻かい)
- 8層…明灰褐色砂質土層 (キメ緻かい)
- 9層…黄褐色土層 (下部は灰褐色)
※砂礫を多く含む

2. 出土遺物 (第11～13図・図版5)

前述のとおり、調査では縄文時代から古代にかけての遺物が、1・2区あわせてコンテナ1箱分程度出土した。また、それらのうち土器等については、器壁が概ね摩耗しており、小破片のものが大半を占めていた。

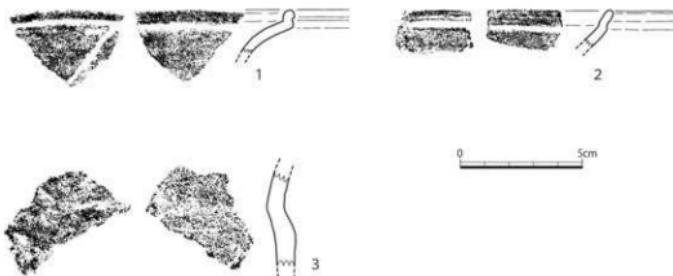
以下、出土遺物の一部を紹介する。なお、1区の溝から出土した遺物の取り上げについては、便宜的に、二つの溝の北側を「1溝」、その南側を「2溝」とし、この二つの溝が合わさった地点より下流側（西側）を「3溝」として記録した。

1～10、13～15（図版5下段・石器集合写真）は、1区出土の遺物である。

1～3は縄文土器である。1・2は浅鉢形土器であり、ともに器面はよく研磨されており、2は黒色を呈している。3は深鉢形土器である。小破片であり器壁が摩耗していることから、器面調整の工具は明瞭ではないが、外面よりも内面の方をより丁寧に仕上げていることが見て取れる。

4～9は土器および土器である。

4は、口縁部の立ち上りや器面調整などから甕とみられるものである。今回の調査で唯一完形復元出来たものである。外面の器壁同様、口縁部は摩耗している上、ほとんどが欠損しているが、幸うじて口唇端部が微妙に残っていた。底部は丸底であり、丸く張る胴は横に長く高さは低い、窄まった頸部から短い口縁部が外傾し立ち上っている。外面の器面調整は摩耗により不明瞭であるが、丁寧に（いわゆる）ナデ調整が施されていたものとみら

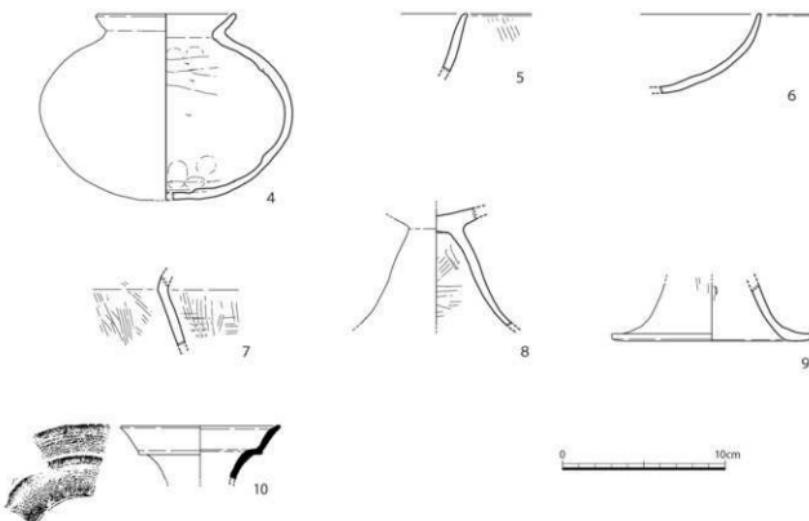


第11図 1区出土遺物実測図1 (1/2)

れる。それに反し、内面の処理は決して丁寧と言える器面調整ではない。そのおかげで、底面となる部分に円形の粘土盤を置き、その後粘土紐を輪積みし、内側から指で押さえながら整形し、最後にその内面を胴部上半のみ削って器壁を整える、といった器の製作過程が判った。

5は壺、6は塊の口縁部片である。5の外面には刷毛目がみられる。7は甕の頸部から胴部にかけての破片である。内外面とも最終調整は刷毛目であるが、外面にはその前段の叩き目の痕跡がみられる。8・9は高环の脚部である。

10は須恵器の甕の口頭部片である。頸部は外傾気味に立ち上り、口縁部手前で大きく外反、屈曲し口縁部に続く。緩く外反する口縁部は、頸部屈曲部上位と口縁端部の内側に凹線気味に段が付けられている。また、口縁



第12図 1区出土遺物実測図2 (1/3)

外面下半部と頸部中央には波状文が施されている。さらに、頸部下端とみられる欠損部分には沈線かと見て取れる稜が残っている。

13～15は腰岳系黒曜石の剥片である。14の両側辺や端部には微細な剥離とともに摩耗したような痕跡がみられ、15の左側辺には微細な剥離痕がみられる。これらの剥離痕は素材面と同様に風化しているとみられるところから、当時の使用によるものとも考えられる。

なお、2・7・10は1溝より、1・3・5・6は2溝より出土したものであり、その他は検出面より取り上げたものである。

11・12、16・17（図版5下段・石器集合写真）は、2区出土の遺物である。

11は須恵器の环である。口縁部の傾斜は緩く、高台は底部の端に付き低い。

12は土師器の楕形土器の底部である。外面とも器面はヨコナデにより整えられていることが見て取れる。高台は、さほど高くなく断面逆三角形である。

16は安山岩とみられるもの、17はサヌカイトで、ともに剥片である。

以下では、これら出土遺物を時期的にみてみる。

1・2は縄文時代後期後葉の所謂黒色磨研土器である。
1は長頭浅鉢であり短く立つ口縁外面には1条の沈線が入っており、天城式とみられる。2は形状的に崩れているが、内外面にみられる段のあり方から短頭浅鉢とみられ、天城式から古閑式の時期のものと想定される。

3は小破片であり、正確な時期は判断出来ないが、1・2と同様の時期でもおかしくない。

7は、その調整の痕跡から弥生時代後期後葉～終末の所産であろうか。

4は、整形痕や器面調整などから古墳時代前期の所産とみられる。

8・9の高环脚部は、その形状から古墳時代中期の所産とみられるものである。

10の須恵器環は、6世紀前半代（古墳時代後期）の所産とみられる。

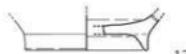
11の須恵器环は、その形状から8世紀代（奈良時代）とみられる。

12の楕形土器は古代の所産であり、その形状から10世紀中頃とみられる。

古代の資料としては、このほかに、今報告では図示していないが、黒色土器の小破片が出土している。この破片は内面のみ黒色を呈しており、器壁は摩耗しており明瞭ではないが研磨されていたと見て取れるものであり、時期的にも12と同様とみられる。

黒曜石やサヌカイトなどの石器類は、縄文時代のものとみて大過ないであろうが、弥生～古墳時代に存在していてもおかしくはない。

以上が、調査で出土した遺物の一部であるが、その他残りの遺物の中で図示に値する遺物はほとんど無いと言つてよい。なお、図示して報告した遺物を一見すると、1区と2区で時期差等を想像させられるが、図示しなかつた破片等を合わせてみると、出土位置等による時期的傾向等は、何ら見出せない。また、遺物の中で主体を占めるような時期も存在せず、時期ごとのまとまりも見い出せない状況である。



0 10cm

第13図 2区出土遺物実測図（1/3）

IV まとめ

これまでみてきたように、今回の発掘調査においては、縄文時代から古代にかけての遺物の出土をみたものの、遺構といえる人為的な痕跡はみられなかった。

発掘調査の主体となったのは、いわゆる溝である。

1区の検出面や2区の確認トレント掘下げの状況から、調査地には東西を軸とし2条から1条を成す黒褐色系の埋土の溝が容易に見て取れた。しかし、前章でみてきたように、この黒褐色系埋土の溝を確認したところ、この溝状の痕跡に対し人為的な行為を見て取ることは出来なかった。

また、土層観察により、黒褐色系埋土の溝が存在して（形成されて）いた時期以外にも、本調査地に溝状の痕跡が存在していたことが判明している。

さらに、溝状の痕跡の有無に関わらず、調査地付近を広い範囲で水が流れていた時代ないしは時期、時があつたことを調査地の検出状況などから窺うことが出来る。あわせて、2区の検出面や確認トレントなどから、黒褐色系埋土の溝が埋まつた後の時代においても、この調査地付近は、頻繁ないしは定期的に水が流れたりするような土地であったことが窺える。

調査地の位置を改めて確認することとする。

盆地内の沖積面に位置する調査地は、東方の城内原などの段丘の存在により、地形的には東から西に向かって低くなっている。

江戸時代、調査地の北側には、当初城下町として建設された豆田町が展開している。

豆田町には、南北を貫く2本の通りがあり、東側を「上町（通）」、西側を「下町（通）」と呼ぶ。

この豆田町は、絵図や古文書などから、元和4年（1618年）に拡大したと考えられている。つまり、大まかに述べれば、当初「上町」側だけの範囲だった豆田町に「下町」を増設したというところである。

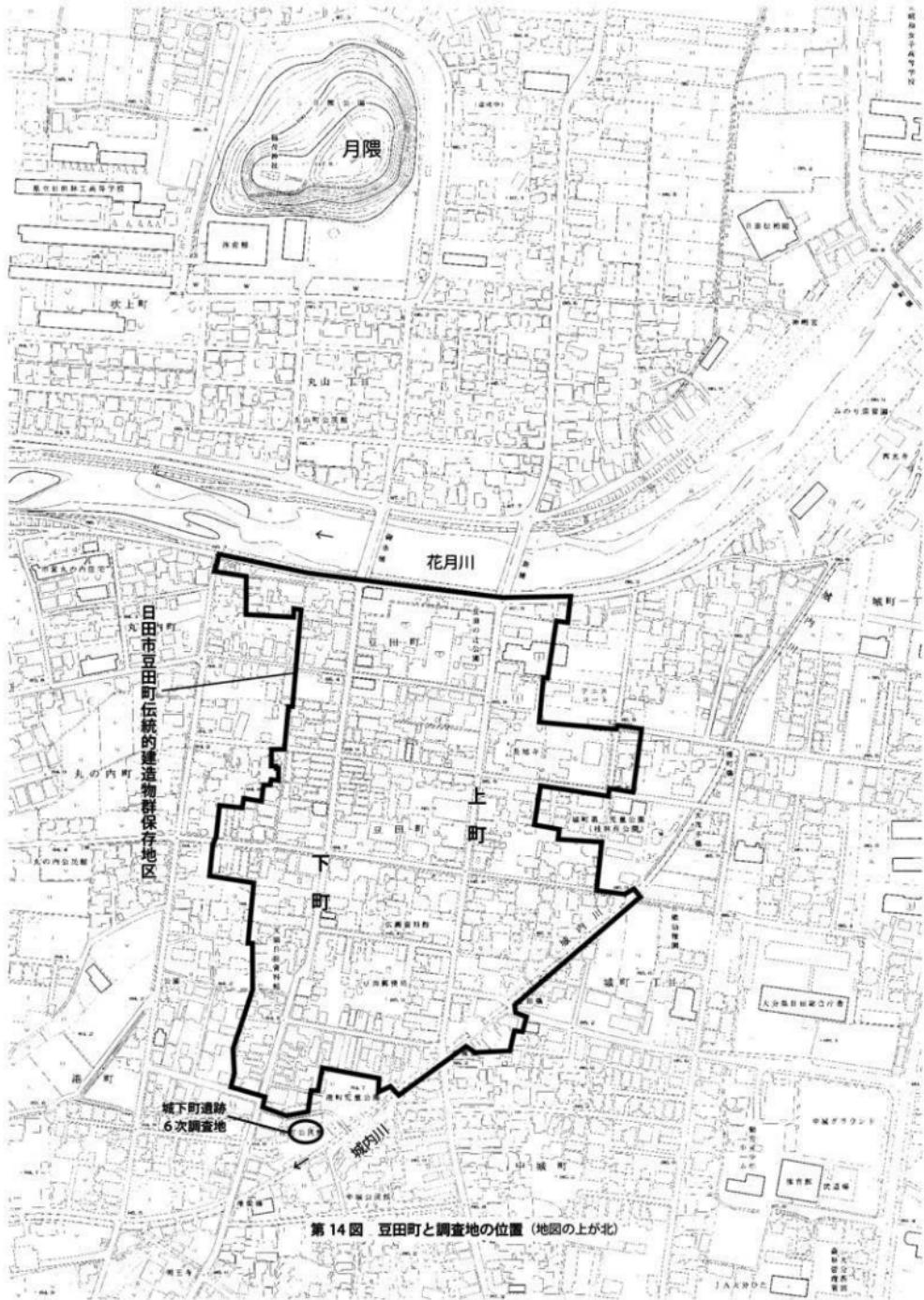
前述の調査地の立地と同様に、豆田町においても、東側が高く西側が低い地形であったことは明白であり、江戸時代の町づくりに至っても、まずは、立地的に高く安定していたであろう「上町」側（東側）に建設したことは、容易に窺けるものである。なお、本来豆田町は、地形的に「上町」側（東側）よりも「下町」側（西側）の方が不安定であったことは、近年被った水害時、上町側よりも下町側の方の水位が高かったという浸水状況などからも窺える。

さて、今回の調査地は、豆田町の下町（通）の南隣に位置し、さらにその南側には北東から南西に向かって貫かれている城内川（江戸時代は中城川と呼ぶ）が流れている。この城内川は花月川（江戸時代は豆田川と呼ぶ）を分流させ、人工的に造られた川であるが、その開削年代ははっきりとはしていない。しかし、豆田町建設に際して造られたと想像されるものである。

いま一度、調査地の位置を考えると、豆田町の立地的に低い下町（通）のはずれの位置、人工的に開削された城内川が豆田町という町を通過した後の町のはずれにあたる位置に立地していたことが解る。つまり、調査地は、土地的に低く不安定な立地であったといえる。

こういった調査地の立地の状況は、今回の発掘調査でみえた溝の状況、溝の中や溝の外側から出土する器壁が摩耗している土器など遺物の残存状況を裏付けるものであり、調査地がいわゆる普段の生活の場ではなかったことを証拠づけるものといえよう。

ただし、今回の調査地において、状態が悪いものの縄文時代から古代にかけての遺物が出土したことは事実である。調査地まで水によって流されてきたこれらの遺物は、それを使用していたであろう先史・古代の人々の生活の痕跡が、調査地の周辺に存在している（存在していた）ことを物語るものである。



第14図 豆田町と調査地の位置 (地図の上が北)

図版1



調査地遠景1（城内原・元宮原を望む）



調査地遠景2（月隈を望む）

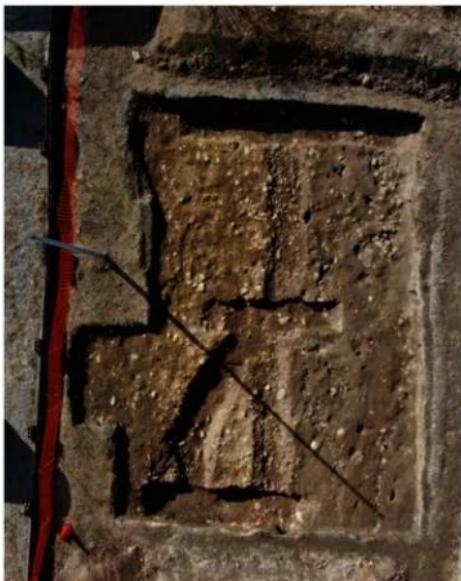


調査地遠景3（城内川下流側を望む）



調査地全景（上空）

図版3





土層5（東から）



土層4（西から）



土層1（西から）



土層2（西から）



土層3（東から）

图版5



石器集合一表 (原寸)

石器集合一表 (原寸)

0 5cm

出土遗物

図版6



表土除去風景



1区発掘作業風景



2区発掘作業風景

発掘作業風景

第1表 出土土器等観察表

遺物番号	取上地点	標示等	法量			内面	外面	内面	色調				地成
			幅幅(cm)	深幅(cm)	側幅(cm)				角石	斜石	白石	黒石	
1 1区 2溝	城下町跡	溝跡	—	—	—	工田による 縫合向テ(ミガキ)	工田による 縫合向テ(ミガキ)	明黄褐色	明黄褐色	●	●	●	良好
2 1区 2溝	城下町跡	溝跡	—	—	—	工田による 縫合向テ(ミガキ)	工田による 縫合向テ(ミガキ)	明黄褐色	明黄褐色	●	●	●	良好
3 1区 1溝	城下町跡	溝跡	—	—	—	工田によるナゲ	工田によるナゲ	淡黃褐色	淡黃褐色	●	●	●	良好
4 1区 1溝	土器部	縫	(8.4)	15.6	—	ヨシナギ 「豊なナゲ」 型割り・指押さし	ヨシナギ 「豊なナゲ」 型割り・指押さし	淡黃褐色	淡黃褐色	●	●	●	良好
5 1区 2溝	土器部	縫	—	—	—	研毛目 ヨシナギ	ヨシナギ 「豊なナゲ」 型割り	黄褐色	淡黃褐色	●	●	●	良好
6 1区 2溝	土器部	縫	—	—	—	ナゲナコナデ	ヨシナギ・施ナデ	淡黃褐色	淡黃褐色	●	●	●	良好
7 1区 1溝	城下町跡	縫	—	—	—	ヨシナギ 印毛目	ヨシナギ・施ナデ	淡黃褐色	淡黃褐色	●	●	●	良好
8 1区 1溝	土器部	縫	—	—	—	ナゲ	ヨシナギ	淡黃褐色	淡黃褐色	●	●	●	良好
9 1区 1溝	土器部	縫	—	—	(12.2)	研毛目・豊ナゲ ヨシナギ	研毛目 ヨシナギ	淡黃褐色	淡黃褐色	●	●	●	良好
10 1区 1溝	土器部	縫	(9.7)	—	—	研ナゲ 状波状	研ナゲ	灰褐色	灰褐色	●	●	●	良好
11 2区 1溝	土器部	縫	(12.2)	(9.4)	3.7	ヨシナギ 印毛目	ヨシナギ・施ナデ	灰褐色	灰褐色	●	●	●	良好
12 2区 1溝	土器部	縫	—	—	(7.4)	ヨシナギ	ヨシナギ	淡黃褐色	淡黃褐色	●	●	●	良好

第2表 出土土器等観察表

遺物番号	取上地点	器種等	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	重さ(g)	備考
13 1区 3溝	剖片	磨岳系磨崖石	19.8	20.5	8.5	2.3		
14 1区 2溝	使用痕剥片か	磨岳系磨崖石	19.0	21.2	4.0	1.3		
15 1区 2溝	使用痕剥片か	磨岳系磨崖石	14.3	14.7	3.1	0.5		
16 2区 1溝	剖片	山岩か	11.9	29.5	4.9	1.6		
17 2区 1溝	剖片	サヌカイト	12.2	19.9	8.2	1.0		

報告書抄録

ふりがな	じょうかまちいせき
書名	城下町遺跡
副書名	—6次調査—
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第137集
編著者名	今田秀樹
編集機関	日田市教育庁文化財保譲課
所在地	〒877-8601 大分県日田市田島町2丁目6-1 TEL 0973-23-3111(代表) FAX 0973-24-7024(直通)
発行年月日	2019年(令和元年)12月27日

ふりがな所収遺跡名	ふりがな所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
じょうかまちいせき 城下町遺跡 (6次調査)	おひかわひらひたし 大分県日田市 ひなたまち400(ばり) 港町400番地1	44204-6	204112	33° 19' 30"	130° 56' 9"	20181205 ~ 20181228	約 160 m ²	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城下町遺跡 (6次調査)	—	—	遺構無し	*主な遺物と呼べるもの 無し。以下、出土遺物。 縄文土器・弥生土器・土師器 ・須恵器・黒色土器・石器	本調査地において、土地に 刻まれた人為的な痕跡は認 められなかった。

要約	城下町遺跡6次調査地においては、縄文時代から古代にかけての遺物の出土を見たものの、遺構といえる人為的な痕跡は認められなかった。 調査で確認された痕跡は溝のみであり、その溝に設定した確認トレーンチによる土層断面や、検出面の状況などから、過去の調査地およびその付近は、頻繁ないしへ定期的に水が流れたりするよう土地であったことが窺え、出土した遺物の時期である先史・古代の人々が、本来生活の場として利用するような場所ではないことが判った。しかし、今回の調査結果から、調査地周辺には近世以前の先史・古代の遺跡が存在しているということだけは明らかとなったといえよう。
----	--





日田市